

ネット月例会採録 (2023年1月21日)

## 出土文献による呉茱萸と山茱萸の考証

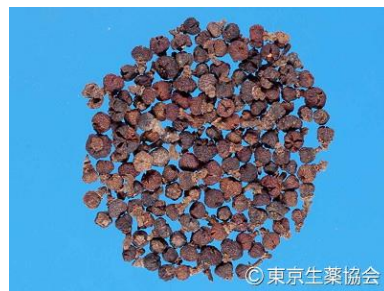
真柳 誠

### 呉茱萸について

『傷寒論』には「食穀欲嘔、屬陽明也、呉茱萸湯主之。得湯反劇者、屬上焦也。(呉茱萸一升、洗 人參三兩 生薑六兩、切 大棗十二枚、擘。右四味、以水七升、煮取二升。去滓、温服七合、日三服)」とある。また「少陰病、吐利、手足逆冷、煩躁欲死者、呉茱萸湯主之」「乾嘔吐涎沫、頭痛者、呉茱萸湯主之」の条文もある。みな方名も薬名も呉茱萸で問題ない。

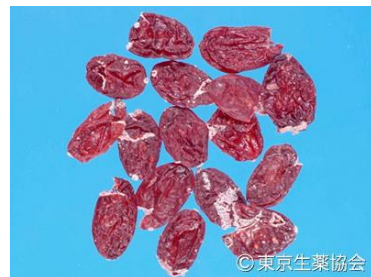
一方、『金匱要略』には「嘔而胸滿者、茱萸湯主之(呉茱萸一升 人參三兩 生薑六兩 大棗十二枚。右四味、以水五升、煮取三升。温服七合、日三服)」とある。また「乾嘔吐涎沫、頭痛者、茱萸湯主之」「六月七月勿食茱萸、傷神氣」の条文もあり、方名や薬名で「茱萸」という名称も使っている。

生薬としてはミカン科ゴシュユ(呉茱萸)の果実で、夏から秋にかけて未熟果実を採集し、陰干する。中国(四川・陝西・浙江省など)で栽培されている。同じミカン科の山椒のような「スパイシーな香り」があり、味は辛く、後に残留性の苦味がある。成分はインドールアルカロイド、キノロンアルカロイドなど。温補する健胃鎮痛利尿薬で、胃内停水、胸滿、嘔吐、冷え、頭痛を改善する薬方(呉茱萸湯など)に配合される。



### 生薬としての山茱萸

ミズキ科サンシュユ(山茱萸)の偽果の果肉。果実が紅熟し始めた時期に収穫し、核を抜いて乾燥する。産地は中国(浙江、河南、山西、四川省など)で、弱いにおいがあり、酸味があり、僅かに甘い。成分はイリドイド配糖体・セコイリドイド配糖体など。収斂作用があり、固精・止汗・止尿を期待して八味丸などに配剤される。



すると植物も生薬外見も味も作用も違うのに、なぜ呉茱萸と山茱萸ともに「茱萸」があるのか、という疑問を昔から感じていた。

## 北京大学蔵の前漢竹簡 (前1世紀)

ところで最近、この疑問を解決する前1世紀の出土文献に気づいた。それは図の北京大学が所蔵する前漢の竹簡で、こう記されていた。「百五十六●治心痛。茈(紫)蓼・黄芩各十、桂・薑・蜀椒・朱臯各一、黄連・山朱臯・少(細)辛各三。凡九物……」。

この治心痛方に朱臯と山朱臯が同時に配剤されている。それで出土した前3世紀の『万物』や馬王堆医方からみえた朱臯や樹臯とは、後1世紀の『神農本草経』で初出する呉茱萸のことと判断できた。

すなわち前3世紀からあった朱臯(サンショウに似た香りのオノマトペ、和語の「スースー」に相当)の名が、前1世紀の天回医簡『六十病方』で後出した山朱臯(山になる朱色で酸味の意)と

「衝突」するので、朱臯は良品産地の呉(南方)を冠した呉茱萸とも呼ばれるようになったのだろう。『金匱要略』の茱萸湯に呉茱萸が配剤される所以だった。



## 名称衝突による改名例

南中国原産のモクセイ科モクセイ属のモクセイ(木犀)を、中国は古くから「桂」と称していた。現代中国でもモクセイを桂花や月桂といい、地名の桂林や桂陽はモクセイが多いことによる。その一種のキンモクセイは日本でも多く栽培されている。

一方、シナモンは熱帯~亜熱帯産クスノキ科 *Cinnamomum* 属の樹皮で、中国では戦国時代後期に人びとにしられたとおもわれる。前漢時代の初期に成立した中国最古の字書、『爾雅』には、「棧、木桂」とある。つまり Cinnamon の音写らしい棧(シン、現代漢語音は qǐn) 字を、木桂(『神農本草経』の牡桂と音通。発音はともに Mu Gui) と訓詁していた。ならば木桂(のち牡桂)はもともと、シンの音韻がある外来品だったらしい。

このシナモン属は葉脈が「圭」字の形につき、前3世紀ころから圭(のち桂)と称し、モクセイ属の桂と衝突した。そこでモクセイ属の桂には宋代になって木犀の名が登場し、衝突を回避するようになった。

中国でサフランを古くは鬱金香と呼んでいたが、のち伝来したターメリックも鬱金と呼んだ。そこで、サフランに番紅花の別名ができたという例もある。